



鶴岡・会津若松

2008.6月



はじめに

母の死を挟んで1年と1ヶ月ぶりの旅行だった。母の喪中、個人的な旅行を控えていたので、延期していた鶴岡旅行と合わせてかなり無理はあったが、今回2泊3日で鶴岡と会津若松、両方訪れることにした。

『大人の休日倶楽部パス』がなかったら、2つの旅行に分けていただろう。鶴岡に行ったら酒田にも行きたい。酒田、新庄、山形、米沢と山形県内を旅行するだろう。会津に行ったら喜多方や猪苗代湖にも行きたい。さらに、福島、郡山、二本松、白河、いわきと福島県内を見て周るだろう。鶴岡と会津の旅行組合せがあまり考えられない理由に、鶴岡－会津の移動に半日以上、只見線を使えば1日かかるというのもある。

このパスはJ R東日本区間なら新幹線も含めて3日間乗り放題で12000円（当時）。学生時代によく旅行で使った周遊券と同じ感覚で旅行できるうえ、特急、新幹線にも乗れる。座席指定も6回まで予約できる、ほとんど必要ないけど。

『大人の休日倶楽部』会員限定。



鶴岡公園



会津鶴ヶ城

庄内藩・鶴岡

きっかけのひとつは、娘から勧められたMr.Childrenのアルバム『HOME』収録の「しるし」。この曲を手始めに、ミスチルのベストアルバム『1992-1995』、『1996-2000』に手を伸ばした。「innocent world」や「Tomorrow never knows」などの大ヒット曲は知っていたが、ほとんどの曲は知らなかった。このベストアルバムの1曲目が、デビュー曲「君がいた夏」だった。

この歌は、作詞・作曲の桜井和寿が子供の頃、毎夏訪れていた彼の母親の故郷鶴岡の思い出がもとになっている。また、鶴岡に所有するスタジオ兼別荘で、小脳梗塞が発症した後静養したことなどを知った。鶴岡は、彼にとって、デビュー曲のモチーフになり、病気、それもまだ若い彼にはとても気がかりな病気からの再出発の地だった。その鶴岡を見てみたい、と思った。

鶴岡はまた、映画化された「蝉しぐれ」、「武士の一分」、「たそがれ清兵衛」などを書いた藤沢周平の故郷でもある。彼の小説は爽快だ。運命の糸で結ばれなかった初恋、妻を寝取られるという武士の不面目を盲目ながら決闘で晴らす、武士でありながら母親亡き後出世と引き換えにその役を全うす

るなど、ハンデを背負わせて物語を始め最後は爽快な気持ちにさせる。全部舞台は、故郷の鶴岡（庄内藩）がモデルになっているといわれている。「蝉しぐれ」で映画デビューした佐津川愛美（子どものふく役）の演技は今でも印象に残っている。



鶴岡公園

鶴岡1

最初の目的地鶴岡に向けて6月19日（木）朝6時に家を出る。予定より少し早い。5分ぐらい歩いたところだろうか、ポケットバックの中の何かを探していて、この旅行のために作った手作りの時刻表と地図などの資料がないことに気づいた。出掛けにパソコンで、一本前の与野駅発の電車の時間を調べて記入し、そのままテーブルの上に置いてきてしまったようだ。時間に余裕があるときによく、蛇足のようなやらなくてもよいことをして、仕事を増やすことがある。一度カバンに入れておきながら、時間があつたのでもう一度取り出して、戻さなかったようだ。にわかには信じられないが、旅行資料を忘れた。

時刻表はまた調べればいいと思ったが、地図や現地の資料はないと困る。戻ることにする。時間はある。そもそも急ぐ旅ではない。とはいえ、時間に余裕があるからといって、余計な作業はしたくない。荷物チェックは、特に大切なものは、記憶に頼らず目でチェックしないと。早めに準備ができて無駄なことはすべきでない。

戻るとやはり、パソコンのところにあった。結局、初めに予定していた電車に乗り大宮駅へ。大宮では約5分の接続時間。京浜東北線と新幹線のホームが駅の両端なので、この接

続時間が少し不安で一本前の電車を考えたのだが、結局余裕で新幹線に乗車。平日の朝6時半ごろの新幹線はまず、自由席は空（す）いている。指定から埋まって行くから。自由席に乗車する人は指定席より自由席が空いているのを知っている常連客。とにかくガラガラの新幹線でまずは新潟をめざす。

越後湯沢に到着。川端康成の「雪国」の舞台となったところの近くだ。当時は新幹線もこの駅も当然なかった。「トンネル」も違うトンネルだった。線路に向かってまっすぐに山の斜面が迫り、駅の近くにはホテル、旅館が集中している。冬なら雪に覆われる山々は、新緑まぶしい小山だ。ここまで1時間強。駒子が駅長さんに「弟をよろしく」、などと言う風情は今はとてもない。

浦佐という駅から小学校の修学旅行と思われる団体が乗ってきた。私服なので小学生であることは間違いないと思う。しかし、小学6年生の1学期のクラスは大人っぽい女子児童がいれば、子どもっぽい男子児童もいて、その差があまりに大きく同じ学年の児童には見えず、不可思議な感じがする。人数は多分20名くらい、1クラスとしても少ない。あまりの少なさにプライベートのテニスや水泳の合宿かとも思ったが、夏休みでもないのにそんな合宿があるわけがない。1学期のど真ん中なのだから学校の行事だ。とすると修学旅行だ。それにしてもどこに行くのか。長岡で降りたので新潟方面ではない。北陸かな。どうでもいいことだけど。朝早い新潟に8時20分

ころ着く電車なので、長岡あたりからは地元の通勤・通学の人も利用していてかなり席は埋まる。

新潟に予定通り着く。大宮から2時間もかかっていない。まだラッシュアワーにかかっている、朝一のアポも難なくこなせる。新幹線はとにかく早い。東京から1時間半で仙台、2時間で名古屋、新潟、3時間かからず大阪。私は上越線の特急に乗り換え鶴岡へ。接続時間は17分ほどあったが、ホームに行くとき既に特急は入っていたので、そのまま乗り込む。朝のあわただしい時間は、新潟でも同じ。程なく発車。

田植えの終わった水田の中をしばらく電車は進む。まだ、左手に海は見えない。右手には山脈が見える。新発田の手前、特急が止まる豊栄駅の目の前に、大きな総合病院がある。高齢者が自分ひとりで病院に行くとしたら駅前にあるほうが便利、ということだろうか。昼間通院の付き添いができる人は限られる。共稼ぎでない嫁だけだけど、この辺に専業主婦は多くはないのだろうという気がした。

新潟から20分余りで新発田だ。新発田農業は甲子園に何度か出ている。この新発田の東側は飯豊山（いいでさん）でもう山形県なのに、海側はしばらく新潟県だ。距離にして約75キロ。新潟は海岸線の距離が長い。北海道を除くと新潟県が一番海岸線が長いのではないだろうか。青森も三方海に囲まれ、下北半島もあるから青森のほうが長いかもしれない。つまり、山形は山間部の南北の距離に対して海岸線が短い。



新潟の海

新発田から約30分乗車すると村上につき、このあたりから海岸に沿って電車は走る。空は曇っていて波も静かだ。海水浴場も少なくひたすら自然のままの海岸が続く。海鳥のための海岸。ところどころに漁港があり漁船が繋がれている。昨今の原油高で漁に出ると赤字になってしまうため、イカ漁などは出漁を間引きすると新聞に出ていた。漁をすると赤字になるとは。原油高はイカ漁師の責任ではなく、またどうすることもできないから、政府が少し援助するしかないんじゃないか。援助ばかり頼られたら政府も困るだろうが、必要な援助はやはり必要だ。政府もお金を持っているわけではなく、国民から徴収した税金だ。それを分配しているだけ。

国民からどれだけ税金を徴収し、何にどれだけ分配するか？
正解はない。

笹川流れを過ぎると海の風景に趣が加わる。瓦が立派になり、つや消しの黒光りをしている。山形県に入ってすぐのあつみ温泉は今は季節外れでさびしいが観光地だ。ここまで新潟県の海沿いには降りてみたいという観光地がなかった。電車の中からではあるが。

鶴岡2

大宮を出て約4時間、新潟を出て約2時間、山形県に入って約30分、10時半鶴岡に着いた。まずは、観光案内所で市内の主な観光スポットを周る「ぐるっとバス」の時刻を訊くと週末だけの運行とのこと。予定が狂ったけど、なければ仕方がない。地図をもらい、鶴岡市の顔ともいえる鶴岡公園を目指す。まず、通り道にある般若寺に寄る。藤沢周平「蝉しぐれ」に登場する寺で門前にその本文が紹介されている。じっくり見



般若寺

るのは帰りにして、まずは、鶴岡公園。20分ほどで鶴岡公園に着く。

今は、庄内藩主酒井氏の鶴ヶ岡城のお堀などを利用した公園として市民に開放されている。城の跡形は残っていない。それほど大きくないが、市民の憩いの公園であることがうかがえる。高山樗牛の胸像と碑、作曲家中田喜直の碑などもある。公園内に大寶館があり、郷土ゆかりの人物資料館となっていて、高山樗牛、藤沢周平、横光利一などの資料がある。

高山樗牛は「滝口入道」で懸賞小説に入選、その後夏目漱石と同時期に国費派遣の外国留学生に選抜され、帰国後は京都大学教授が決定していたが、壮行会後に咯血して留学辞退、療養に努めたが、残念ながら31歳で肺炎で逝去。『滝口入道』は学生時代に読んだ記憶があるが何も覚えてない。

横光利一は夫人が鶴岡の出身で、結婚後鶴岡、湯野浜温泉、湯田川温泉などで過し作品も残している。藤沢周平はいうまでもない。『蝉しぐれ』や『たそがれ清兵衛』が映画化されている。藤沢周平の書斎の写真があった。藤沢氏の書斎だからなんだろうけど、何かが生まれそうな雰囲気がある。やっぱり仕事場は大事だなあと考えたが、仕事場よりは仕事だろうね。仕事がすばらしければ、仕事場も良く見える。

鶴岡公園の道を隔てた正面に慶応大学の鶴岡キャンパスがある。先端生命科学研究所と書かれている。なぜ、鶴岡なの



慶応大学先端生命科学研究所

かわからないが、鶴岡市にとって慶応大学の誘致は大きかったのではないか。

市役所の向かいに庄内藩校「到道館」の史跡がある。ここで知った、西郷隆盛と庄内藩のエピソードはおもしろい。

維新前夜、慶応三年（1867年）も残すところひと月余り、江戸市中取締役だった庄内藩は、薩摩藩の意を受けた浪士隊が関東一円で起こすゲリラ活動による攪乱工作に手を焼いた幕府の命により、薩摩藩邸に大砲を打ち込み焼払っている。庄内藩は佐幕派だった。

東北戦争で庄内藩は最後まで新政府軍に抗戦、唯一連戦連勝を続ける。相手は薩長軍ではなく、新政府軍に移った秋田藩や



致道館

新庄藩が相手ではあり、酒田の大商人本間家の財力により新鋭兵器が使用できたのも一因である。会津藩の降伏後に降伏したが、最後まで新政府軍を藩内に入れなかったという。

敗戦後庄内藩は、会津への国替え、17万から12万石へ減封、そして国替え中止となる。町や城を焼かれ、所領没収され青森に転封となった会津藩とは大違い、「朝敵」としてともに東北戦争を戦ったが、戦争後の処罰は比較的軽かった。これは西郷隆盛の寛大な沙汰があったとされる。この縁から、幕末時の藩主酒井忠篤（ただあつ）と旧庄内藩士70名は、維新後鹿児島に渡り、西郷の教えを受けている。

「南洲翁遺訓」は、西郷隆盛が大赦となった1889年翌年、西郷の教えをまとめて刊行したものだ。編集の中心になったのは、元庄内藩重臣菅（すげ）実秀だった。菅は、1871年西郷に初めて会い、肝胆相照らし、西南戦争が起きた時、菅は、

「西郷は本気で立っていない。立っていたら私に知らせが来るはずだ」と言ったそうだ。現在、鶴岡と鹿児島は友好都市。

はじめつながっていなかった鶴岡と会津がつながってきている。ともに京都守護職と江戸市中取締役という幕府の要職にあり、長州と薩摩ににらまれ、朝敵となり追討令を出される。違いもある。白虎隊の悲劇は庄内藩にはない。厳罰と寛大な沙汰。籠城を迫られ、市中が焼き払われ、徹底的に侵略・略奪された会津藩に対し、叩きのめされずに降伏を認められた庄内藩。城を自ら取り壊し、再建した会津藩の鶴ヶ城、庄内藩の鶴ヶ岡城は破却。斗南藩（青森県）に転封になった会津藩、庄内藩は東北戦争後会津への国替を言い渡されたが、補償金を支払って取り消してもらっている。庄内藩と会津藩はつながるが、同じ敗者でありながらその差は不公平と叫びたいくなるほど違う。

致道館を後にして、正面の市役所の前を通り、鶴岡カトリック天主堂に寄る。さらに、丙申堂に至る。ここは映画「蝉しぐれ」で文四郎とおふくの再会シーンが撮影されたところであり、このあたりが鶴岡市の中心。市内を東西に流れる内川に沿って山王通りに入る。内川を京都の鴨川と比すのは無

理があるが、古くからの伝統ある街の趣を伝えてくれる情緒のある川だ。鶴岡総鎮守三社のひとつである日枝神社があり、ここを通って日吉通りを600メートルぐらい行くと鶴岡駅の正面に出る。約3時間半で市内の主な所を徒歩で周ってしまった。



2点とも丙申堂

鶴岡3

ホテルにチェックインをし一休みして、湯野浜温泉行のバスに乗る。当初の予定より1時間ほど早い。曇っているので夕日は見られない。とにかく、鶴岡に来た第一の理由、湯野浜に行くこと。バスで40分ぐらい。ミスチルの「君がいた夏」を聴いて鶴岡（湯野浜）を見てみたいと思った。桜井はここに別荘兼スタジオを建てている。彼の別荘が湯野浜にあるとはっきりとはどんなにネットで調べても出てはこなかったが、鶴岡の海の近くの温泉地とのことなので、湯野浜だろうと思っていた。念のため観光案内所で訊いてみた。いい歳をした親父がミーハーな質問をするのはかなり恥ずかしかったけど、もし見当違いの場所に行ったら、感慨にふけたらもっと滑稽だからね。

やはり、湯野浜だった。ただ、「売りに出ているらしい」とのことだった。聴いたすぐは、要するに、湯野浜であることが間違いでなければいいのよ、と思ったけど、正直驚いたし、だんだん興味が薄れて行くのがわかった。そうか、彼はもう湯野浜や鶴岡に興味がないんだ。とにかく、行くことを変える気持ちはなかった。バスを待ち湯野浜に向かう。

小脳梗塞で静養したのは鶴岡の別荘との情報があった。子どものころから慣れ親しんだ大好きな土地に建てた、噂では



湯野浜海岸

3億円といわれる別荘を売りに出す理由は桜井自身にはないだろう。家族があまり湯野浜の別荘に愛着を感じないか、飽きたからではないだろうか。彼もひとりで来て滞在する気はないだろう。子どもが大きくなり、幼稚園や小学校があり、いつでも好きな時に来られるという状況ではなくなったからかもしれない。

湯野浜の中心で降りた。中心と行っても300メートルぐらいの海岸線に砂浜と20-30の旅館・ホテル・民宿が立ち並んでいるだけ。砂浜はきれいで広い。夏、青空のもとたくさんの海水浴客がいたらもっと違うんだらうけど、いまいちだなあ、というのが正直な感想。曇りの梅雨の合間の砂浜を云々する

のは、気の毒だが。

散歩もそこそこに公衆温泉に行った。透明なお湯でかなり熱い。熱いお湯に慣れてないので、ならしならし入った。温泉は気持ちよかった。でも、私には熱すぎる。銭湯でもどこに行ってもそう感じるから、私の好みが低温すぎるのだろう。

5時過ぎのバスで鶴岡に戻る。ミスチルの「君がいた夏」は、今日の湯野浜海岸より100倍はよくできていた。作品に感動してその場所を訪れてみると、がっかりすることが少なくない。それは、私たちが作品から受けたイメージを好きなように縦横無尽に膨らませていることもあるだろう。でも、ほとんどは、制作者のクリエイションがすばらしいからだ。その場所が作品を作らせているのではなく、その制作者がその場所をモチーフに制作した、ということ。その制作者は、他の場所であっても、やはり、何かを作っている。「君がいた夏」は作らなくても、何かを作っている。だから、作品に感動してモチーフになったその場所に行っても、感動するより拍子抜けしてしまうことが少なくないのだろう。でも、桜井が湯野浜での少年の頃の体験をもとに「君がいた夏」を作ったという事実は変わらない。私の「君がいた夏」は終わったけど。



湯野浜海岸

鶴岡4

夕方6時ころ鶴岡に戻る。駅の周辺には帰宅を急ぐ若干の人と、時間とエネルギーを持って余した高校生だけだ。昼間はそうでもなかったけど、帰宅途中の高校生を含めて駅周辺は高校生ばかりだ。ほとんどの学生が自転車を利用している。本当に鶴岡は高校生ばかり目立つ。

一休みした後食事に出る。山形は魚もお米も野菜も果物もおいしいそうだ。でもやはり、魚と日本酒。チェーンでない居酒屋に入り、鶴岡地酒の「大山（おおやま）」冷酒とマグロの刺身とイカソーメン。刺身盛合せがマグロとサーモンとはまちだったので、マグロの刺身とイカソーメンにした。イカソーメンは元祖とうたってあった。イカソーメンの元祖はないだろうと思ったけど、元祖には弱い。「大山」がおいしい。マグロの刺身がおいしい。このふたつで最高。ここで飲むべきは、焼酎じゃないと思う。メニューを見ると焼酎の肩身も決して狭くはないので、結構飲まれているようだけど、私のような旅行者は、やはり地酒とうまい肴を頼みたくなる。山形に旅行したら、やはり、日本酒だろう。九州に旅行したら焼酎だし、ヨーロッパならワイン。

元祖のイカソーメンが肩書き倒れ。そんなに悪くなかったけど、「元祖」で期待させた分マイナス。量も多すぎた。マ

グロはそうでもなかったけど、イカは盛りが良過ぎた。イカは食べ過ぎないほうがいいでしょ。知らないけど。薬味のしょうがも新鮮ではないように感じた。でも、日本酒がおいしいからいいか。2杯目のお酒は「飛切（とびきり）」を爛でもらう。爛も良い。今晚はほどほどにしておく。今朝6時頃家を出て、10時半に鶴岡に着き、歩き回ったから早めに休む。

翌日5時に起きる。6時から1時間ジョギング。昨日周った鶴岡公園、市役所、内川、さらに昨日足を伸ばさなかった銀座に向かう。どうやら銀座あたりが鶴岡の繁華街のようだ。駅から1キロくらいか。駅の周囲に繁華街が見当たらなかったがこんな所にあるとは。市役所などの官庁街から500メートルくらい。銀座？を後にして、昨日周ったルートをジョギングで回る。般若寺にも寄ったが、特に何も・・・。

鶴岡はこじんまりとした都市で、人も建物も密集していない。高層のビルもほとんどなく、「銀座」でも空が広い。そしてところどころで、古くからの由緒ある街であることも感じさせてくれる。藤沢周平の時代小説の舞台、ミスチル桜井の別荘兼スタジオがある街。靈感はあまり感じられなかった。日本酒と食べ物はおいしかった。人とはあまり触れ合わなかったので人情はわからなかった。

藤沢周平の小説やミスチルの歌は、鶴岡が生んだのではなかった。それは、やはり、藤沢であり桜井が生んだ作品だった。ただ、逆境や不幸に会いながらそれに不満をぶつけるの

ではなく、まずそれらを受け入れ、さらにこう生きたら良いのではないかと静かに提案する作品に、または、素直に人を愛することを伝える作品に、鶴岡が何も影響与えなかった、とも思えない。

気持ちの良い都市だった。嫌な思いや感情を抱かせない街だった。それは、本間家の繁栄、東北戦争で唯一局地戦で負けなかった藩、戦負藩と思えない戦後の軽い処分、鹿児島や西郷隆盛との交流、などが影響しているのだろうか。今はちょっと寂しいかな。



銀座



カトリック天主堂

会津藩・会津若松

2日目は20日（金）9時過ぎの特急で会津若松に向かう。鶴岡には23時間しか居なかったということになる。

ここ1年、白虎隊の悲劇がなぜ生まれたのか、東北戦争とは何だったのか、なぜ、会津藩が朝敵とみなされたのか、奥羽越列藩同盟はなぜ結ばれたのか、少しずつ調べていた。そんな時、佐藤敦之（あつし）選手が北京五輪マラソン代表に選出された。佐藤は会津若松の出身。早稲田大学時代から駅伝ではエース、卒業後中国電力に進み、同僚の油谷、尾方とともに中心選手となって中国電力日本一に貢献するも、油谷や尾方の陰になり個人としてはなかなか五輪代表として世界の舞台に立てなかったが、ついに今回代表に選ばれた。現役時代「走る修行僧」と言われた大学の先輩瀬古をして、「走る修行僧は佐藤」と言わしめるほど、生活全てを陸上競技に捧げ、ゴール直後、ふらふらしながらくるりと振り返り深深と一礼し、残り三方にも一礼する礼儀正しさ。一分の隙もない好青年。その一途さ、まじめさ、礼儀正しさから、同じ福島県出身で東京五輪で銅メダルを獲得した後、期待にこたえられないと自死した円谷幸吉に姿を重ねてしまう。そして、さらに白虎隊士にも。会津若松に行ってみたくなった。



鶴ヶ城

会津若松1

2時間かけて特急「いなほ」で新潟に戻る。新潟からは普通電車で新津に出てここで乗り換え、「森と水とロマンの鉄道」磐越西線で会津若松まで一本。只見線とともにSLが走る鉄道で、所要時間は約2時間半。阿武隈川に沿って山の中を黙々と走る。秘境という少し大げさだが、ほとんどの駅は、駅前に商店さえない。もちろん無人駅。2時間半も山の中を走る路線があることにびっくりする。それでも時々地元の人に乗ってきては降りて行く。ある主婦はスーパーで買った食料品を両手に持ち、ある老人は病院の帰りなのかもしれない。また、温泉があるのだろう、中高年の旅行客が三々五々下車していった。

磐城西線の南を走る只見線は、小出から会津若松まで4時間かかる。新潟（越後）方面から会津若松に通じる鉄道が山の中に南北2本、このことから、江戸時代まで会津は越後との交通、関係が深かったことがうかがえる。

計画を立てたときは只見線に乗ろうと思ったが、只見線を使えば若松に着くのは5時20分になってしまう。朝9時過ぎに鶴岡を出て、1日電車に乗っていることになる。それで、午後2時過ぎに着く磐越西線に変えたが正解だった。着いてから少し街を歩く時間ができたから。

磐越西線だって鶴岡から5時間かかる。久しぶりに長時間、乗り物に乗ったが、乗り換えなしで乗るには3時間以内、乗り継ぐ場合は2時間+2時間ぐらいが良いところだと思った。それ以上になると体も心もしんどくなってくる。昔はこんなことはなかった。海外に行く場合、ヨーロッパやアメリカ東海岸なら12時間ぐらい飛行機に乗らないといけない。着いてからのことを考えて心がウキウキするばかりで、今となってはよく、苦にもせず乗っていたらと思う。もう長時間乗車が苦痛になってきた。外国に行くときはしょうがないが。

喜多方を通過して会津若松に午後2時過ぎに着く。喜多方で下車を考えたが、途中下車すると電車の本数が少なく、若松に着くのは夕方になってしまう。若松について早速ホテルにチェックイン、荷物を置いてすぐホテルを後にする。市内観光に最適の市内周回バスに乗る。1回乗車200円、1日フリーパス500円。七日町から鶴ヶ城を回り、飯盛山を通って駅に戻る「ハイカラさん」とその逆周りの「あかべえ」があり、「ハイカラさん」が30分おき、「あかべえ」が1時間おき（当時）に出ている。もっとも早いバスは「あかべえ」だった。若松駅をスタートして飯盛山、武家屋敷、鶴ヶ城、野口英世青春通り、七日町、駅に戻るというルート。鶴ヶ城のあたりは市役所、裁判所、県・国合同庁舎、市民ホール、陸上競技場、野球場などのグラウンド複合施設、県立病院などが集まる市の中心。「ハイカラさん」と「あかべえ」、なんとい

うカップリングだろう。「あかべえ」は赤べこ（会津地方の民芸品）から来ているのだろうが、「ハイカラさん」は野口英世、新島八重からだろうか？

夕方だったためだろう、陸上競技場の前をバスが通ったとき、競技場周辺いたるところ高校生、中学生であふれていて、彼らがオレンジ色の夕日に照らされ、きらきら輝いているのがあまりに美しく息を飲んだ。こんな青春を絵にしたようなシーンが現実にあるんだと思った。

この運動複合施設の隣には會津風雅堂という立派できれいなホールがあり、その入口、周辺もまた制服の高校生であふれていて、少し離れた木陰では先生のタクトで10数名の学生がコーラスの練習に余念がない。吉永小百合が高校生役で出てきそうな青春映画のシーンの連続でもう啞然。さっきまでは「白虎隊が自決したここが飯盛山か」と感慨にふけていたのに。

市役所の正面に垂れ幕、「祝 北京オリンピック出場 佐藤敦之（若四中、会高）選手がんばれ」とある。さっき通り過ぎた陸上競技場は市内中高陸上選手の聖地なのかもしれない。佐藤選手も中高時代あそこで練習したんだろう。彼は中学の時から全国大会出場にしている、優勝をしたこともある。高校でもインターハイに出場している。そして、会津高校は、民主党の渡部恒三氏も卒業した地元の名門校。佐藤選手は地元の中高生のあこがれなんだろう。だから、市内の中高



風雅堂

の陸上部全員集まっているんじゃないの、というくらいたくさん生徒がいて、あんなにキラキラ輝いていたんだ。そしてさらに先輩に、10代で自決した白虎隊がいるから、いやそれは考えすぎだろう。でも、会津若松は高校生が輝いている、これが初日の印象だった。繰り返しになるけれど、ちょうど放課後の部活動開始時刻から下校時刻にかけてだったからだろうけれど、いかにも充実した高校生活を送っているような高校生ばかりが目についた。無駄に時間を過ごしていない。青春時代迷ったり悩んだりして回り道をしている子は、都会に比べて少ないように思えた。勉強と部活以外何をする必要があるの？それだけで精一杯、と言ってるような気がしてならなかった。磐越西線を選択して大正解。

もうひとつ、市の中心部を歩いて気になったのが、風雅堂のような見事なホールがある反面、福島県立病院や市役所の建物の古いこと、みすぼらしいこと。市役所や、公立の病院などはけっこうきれいなところが多い。県立病院などは治療してもらうのをちょっとためらってしまうほど、古くてうらぶれている（失礼、当時、今はわからない）。市や県の財政が厳しいのかもしれない。



野口英世通り



七日町通りスポーツ用品店

会津若松2

野口英世青春通りで「あかべえ」を降りる。この先は江戸時代を忍ばせるレトロな七日町を通って会津若松駅に戻るだけだから。野口英世＝猪苗代と思っていたから、なんで若松に野口英世の青春通りがあるのかわからなかったが、猪苗代と若松は隣同士で、野口英世は火傷した左手の手術を若松で受けている。これが医学を志すきっかけとなり、後にその執刀してくれた渡部先生のところで書生として医者になるための勉強に励む。通りを歩いて行くと野口青春館がある。1階がレトロな落ち着いた喫茶店、2階が記念館になっている。彼が書生として過した16-19歳（別の資料では若松にいたのはもっと短期間で早々に上京したとある）の資料を見て思ったのは、モチベーションが一番大切だ、ということだ。彼はひたすら勉強したらしい、他の書生が休憩をしている時も。そうさせたのは、彼が左手の手術を受けて、医学に感動したからだ。とにかく、病やケガからひとりでも多くの人を救うために医学をめざした。彼がめざしたのは医者ではなく、医学によって人を助けること。だから、彼は寸暇を惜しんで勉強した。できるだけ多くの人を救うのに、これだけ勉強すれば良い、というリミットはない。もっとも彼の左手は完治はしなかった。手術で多少指が伸ばせて、動かせるようになっただ



野口英世が書生をしていた医院

けのようだ。写真に写る時は、布を巻くか手袋をしている。左手のハンディキャップは猛勉強の理由のひとつだろう。片手が思うように動かさなければ医者として制約がある。同時に、ハンディキャップは世界の野口に至らしめた一因でもあるだろう。細菌学者にならなかつたら黄熱病などの研究で功績を残さなかつたらろうから。ハンディキャップがなかつたら細菌学者のような基礎医学研究者になっていなかったのではないか。そもそも医者になっていただろうか。それでも、世界の野口にしたのは、モチベーションの強さだと思う。伝記は小学校の時よりも中高生が読んだほうがいいんじゃないだろうか。小学生だとまだ現実と動機が強く結びつかないから。



野口英世青春館

野口はハンディキャップをバネに功績を残した。禍を転じて福としたが、誰でも彼のようにできるとは限らない。まず、できれば、禍は起こらないほうがいい。でも、禍は起こる。起きてしまったら、その時はそれを受け入れて、野口のようにバネにする。そして、バネにできなかつたら、それも受け入れる。野口英世のようにできないことのほうが多いのだから。ただ、禍を理由に道から外れるべきではない。

青春館1階の喫茶店はいかにも落ち着いた雰囲気があって入りたかったけど、1カ所目でお茶にするのは少し早すぎるように感じた。(ほんとうは別の理由)

野口英世青春通りから、只見線会津若松の隣駅七日町に向かって江戸情緒の残る通りを歩く。やる気満々の高校生と星

雲の志に燃え世界的医学者となった野口英世に刺激を受け、到着早々高揚した気持ちを江戸の街の散策が静めてくれた。ここら辺で冷酒だけをちょっと飲ませてくれるところは、あるわけないよな、などと思いながら歩いていると、あるじゃない。思いは通じるものだ。七日町駅に着き、来た道を引き返してしばらくすると「カフェ・バー→」の標識がある。矢印のとおり脇道に入っていくとすぐが空き地、その隣にはおみやげ屋さんがあるだけでカフェ・バーはない。よく見るとカフェ・バーの看板が店から出ている。念のため店の前まで行ったが、おみやげ屋さんだ。もう一度標識まで戻って、矢印どおりに来て、店内を見ると、中にバーカウンターがあった。

おみやげ屋さんの中にカウンターがあっても文句はない。ただ外からはわかりにくい。だから「カフェバー→」の標識を出したのだろうけど、ならば「おみやげ・カフェバー→」としたほうがいいと思う。

中には数人の客が、漆器やアクセサリなどを見ていた。店の人は1人、カウンターには客もスタッフもいない。カフェはやっているか訊くと営業中だという。カウンターで待っていると、お客の相手を済ませた店の人がカウンターの中に入った。20代半ばの女性。壁に貼ってある「利き酒セット」を頼む。このメニューを壁に見つけたときのうれしかったことといったら。「おあずけ」の犬みたいにおとなしく店の人の手が空くのを待っていた。



七日町通り

さすが会津、ビールでも良いや、と思っていたら、カフェバーで冷酒が飲める。今回の旅行で全く日本酒に期待していなかった、鶴岡でも会津でも。というか、最近ほとんど芋焼酎しか飲んでなかった。でも、昨日の鶴岡の日本酒がおいしかったから、若松に着いて七日通りを散策しながら、会津で飲むのも絶対日本酒だと思っていた。日本酒の飲めるバーがあったら最高、と思いながら通りを歩き、でもまだ5時だし、そんなバーがあったとしても開いているわけないし、居酒屋というのもまだ時間が早すぎるしなあ、などつつらつつら考え、通りの落ち着きに癒されていたところだった。

利き酒セットを頼むと、カウンターの上に日本酒4本、ぐい飲み4種並べた。お酒は4合ビンが3本と1升ビンが1本、4種類のお酒とぐい呑からひとつずつ選ぶ。ぐい呑は半合は入ろうかというおわんを小さくしたものと、それより一回り小さく18面体を半分に割った形（底面は八角形、側面は台形が8面）、がそれぞれ黒と赤の2色ある。軽いのでプラスチックの会津塗？このぐい飲みはここで飲むだけではなく、おみやげに持ち帰れるという。ここで飲むだけだったらおわんだけ（多分入れてくれる量は変わらない）、家で使うんだったら小さいほうがいい。飲みすぎちゃうから。2杯で1合はまずい。このセットが500円。それで18面体を二つに割った黒いぐい飲みと日本酒は、ボトルがボンベイサファイアジンのようにきれいな水色の純米大吟醸「ゆり」にする。他の酒も純米酒や吟醸酒ではあるけど、純米大吟醸はこれだけ。どのお酒も500円だと言う。

「ちょっと厳しいんですけど」

純米大吟醸と吟醸や純米酒が同じ値段ではそりゃ厳しいだろう。でも、同じにしちゃうところが「いいね」。

添えられてきたのが、梅。これは梅干ではなく、梅酒に入っているような梅、でも赤色をしている。梅で一杯もいい。

「ゆり」は言うまでもなくおいしい。上品な酒。キレがあるのにコクがある。スーパードライの逆、喉越しはスッキリ、だけどただ辛口なだけではない。きちんと日本酒の味わいが



七日町通り

口の中に広がる。もう一杯もらう。今度は唯一の一升ビンの「泉川」。まず間違いなくここの代表的な日本酒だろうから。これも、おいしい。もう何飲んでもおいしい、って感じだけど。2杯目でお勘定に千円を出すと、お代わりは200円だと言う。つまり全4種類の利き酒が1100円ということ。それは良心的。「じゃあ、もう一杯」と口から出かかったけど、ここで止めておいた。今宵はこれからだ。この店の人の物言いや仕種が落ち着いていて、余計なことも言わず媚もせず、でも、質問には的確に答える、なかなかの女性だった。オーナーか共同経営者、オーナー夫人、雇われ店主、そういう立場の人かと思われた。ものごし、言動にどこか責任感と自負が

感じられた。

このカフェ・バーの近くに、造り酒屋があるのを通りすがりにチェックしておいた。帰りに日本酒を買おうと思っていた。その造り酒屋、鶴乃江酒造に入る。びっくり、さつき飲んだ「ゆり」がある。でもここの看板の酒は「中将」。店に入ればすぐわかる。一番目立つ所においてあり、かつ棚を占める割合も大きい、「中将」銘柄で数種の酒がある。「中将」の純米酒を買う。「ゆり」は誰か気の合う仲間と飲んだほうがいい。自宅で独りで飲むにはもったいない。せこいからではなく、独り占めするべきではないから。

七日町通りには明日また来ると思いながら、4合ビンを持って野口英世青春通りまで戻る。そこから会津若松駅、ホテルまで一本道、10分ぐらいなので、歩いて戻ることにする。その土地を知るには。タクシーよりバス、バスより自転車、自転車よりジョギング、ジョギングより歩きだ。歩きが一番。

駅に向かう大通り沿いに、閉店してそのまま放置されている大型店舗がある。鶴岡でもそうだったが、閉店してそのまま放置されているのを見るとやはり、地方の景気の悪さを感じる。

ホテルに戻り、荷物などをとき、一休みして夕飯に出る。ホテル内にも和食の店があり良さそうなのだが、やはり、街に出てみたくなる。しかし、今晚は雷をともなった夕立になるかもしれないという予報なので、近場にしておく。

地元榮川酒造の純米吟醸と純米酒「榮川」を一合ずつ、タラバガニサラダ、地元名産の馬刺しとニシンの山椒付けを肴にする。とにかく、この地酒の「榮川」純米吟醸も純米酒もおいしい。今回別に日本酒を楽しみにしてきたわけではなかった。お正月でさえ日本酒は飲まないほうだ。でも、その地に来てみると、何となく何を飲むべきかわかるじゃない。メニューには焼酎をはじめほかのお酒もあったし、地元の人焼酎を飲んでいる人が多かったけれど、旅行者が飲むべきものは、自ずとお酒のほうから誘いかけてくる。昨日も今日も地元の日本酒を楽しんだ。何となくではなく、ましてや惰性で飲むのではなく、酔うためでもなく、日本酒を飲もうとして飲んだ。だから、楽しめた。今日も2合ぐらいにした。やはり、2種類は楽しみたい。そして、ほろ酔いぐらいに留めておきたい。今日は利き酒セットでこの前に2種類の日本酒も楽しめた。昨日は燗も試したが、今日は冷やした酒だけ。季節にもよるのだろうけど、燗よりも室温よりも冷やして飲ませる日本酒がメニューに多かったから。馬刺しはおいしかったが、ニシンの山椒付けはニシンが固かった。地元の家庭料理だというが、わたしにはちょっと。

ホテルに戻り天気予報を見ていると、「浜通り」は、・・・。「中通り」は、・・・。「会津」は・・・。と言っている。「会津」はともかく、「通り」というのが始め「通り」の名前だと思ったが、天気予報で使うのだから「通り」

名のわけではない。「浜通り」は太平洋側でいわき市など、「中通り」は阿武隈川沿いの中央部で福島市、郡山市、白河市など。そして福島県の西側部分が「会津」。地形的にも天候が違うのだろうが、廃藩置県で平県、福島県、若松県が合併して福島県が成立しているから、成立の過程、歴史が関係していると思われる。前の2地区が「・・・通り」で、会津は地名なのもそのためかもしれない。

今日は軽く市内を一回りしただけ。明日はいよいよメインの鶴ヶ城、飯盛山・白虎隊。高校生に感動し、野口英世に敬服し、日本酒を堪能した。こういう組み合わせがあってもいい。



七日町通り

会津若松3

会津2日目、旅行3日目、つまり今日21日（土）帰る。市内周回バスの始発は8時の「ハイカラさん」（鶴ヶ城から飯盛山周り）なので、鶴ヶ城にまず行く。この始発に乗る観光客はまだ少ない。鶴ヶ城北口で降り、お城を目指す。中はお城の再現ではなく、完全に博物館だった。会津藩の歴史、松平家の系図、白虎隊の19士の肖像画。器や備品、武器なども。この鶴ヶ城はもちろん取り壊して再建されたものだが、幕末の1ヶ月の籠城による会津戦争で天守閣は壊されたが、城そのものは崩壊していない。当時、イギリスなどから大砲が輸入され使用されたが、鉄の玉を発射するまでで、その鉄球そのものがまだ爆発はしなかったか、その爆発力は城を吹き飛ばすほど強力ではなかったようだ。それでも、銃弾に比べたら直径10センチの鉄球の破壊力は強力だ。

会津藩の藩主は、戦国時代後半は仙台の伊達政宗、豊臣時代になると統一に功のあった蒲生氏郷が伊勢城主から会津42万石を移封され、彼が地名を若松と改名し、城名も彼の幼名にちなんで鶴ヶ城と変更した。さらに、江戸時代になり上杉謙信の養子などが治めた後、保科正之が藩主となる。

保科正之は第2代将軍秀忠の庶子（相続権のない子ども）で、第3代将軍家光の執政を助け、後に松平姓と葵の紋を与え



鶴ヶ城

られ、徳川の親藩に取り立てられる。だからそもそも徳川家とは所縁（ゆかり）が非常に深いというか、血縁がある。

第7代藩主は4歳で家督を相続、20歳で死去、子どもがなかったためこの時、秀忠から続いた男系男子の跡継ぎは途絶えた。第8代は美濃高洲藩から16歳の養子を迎え、家督を相続させる。この容敬（かたたか）にまた男子がなかったので、娘に同じ美濃高洲藩から容保（かたもり）を婿養子に迎え1852年9代目藩主となる。容敬と容保は叔父・甥の関係。美濃高須藩は徳川御三家筆頭格の尾張藩の支藩、その関係で2代続いて会津藩に養子を出している。

会津戦争で籠城した城内には、婦女子も多くいたそう。炊き出しや看護、最後「降参」の白い生地は、この女性達が

残った布きれをかき集め縫い合わせて城から垂らした。中には砲術師範の家に生まれ、大砲操作の指導をし、自らは7連発銃を男装して打ち返した女性もいた。後に新島襄と結婚して同志社大学設立を助けた『八重の桜』山本八重である。家老西郷頼母（たのも）の妻母など21人が自害する婦女子隊の悲劇もあった。

1ヶ月の籠城、城内に5000人近くおり、うち600人強は婦女子。周囲は板垣退助率いる新政府軍3万人。9月23日には、庄内藩以外奥羽越列藩同盟は全て降伏していたから、ほとんどの新政府軍はここに集結していて、絶対勝ち目はなかった。そもそも最初から勝ち目はなく、投降も許されずに始まった戦（いくさ）だった。

1ヶ月もよくもった。意地しかなかったろう。武器弾薬・着替えも食料・水も限られていた。時期は8月下旬から9月、旧暦とはいえ、まだ残暑もあり衛生面で問題もあったろう。

征討軍が会津城下に攻め込んだ日、戦死者460名余、半分の230名の婦女子や老人は足手まといになると自刃した。容保は城内にいた。

鶴ヶ城に入ったのはまだ8時半ころで人影もまばらだったが、しばらくするとグループ客も目立つようになり、どんどん後から来た人に追い越された。土曜日ということもあるのだろうけれど、鶴ヶ城は会津若松のシンボルだ。天守閣に登る



鶴ヶ城から飯盛山を望む

と会津若松市を一望できる。飯盛山も見える。佐藤選手の出身校会津高は城の南側。そのほぼ真北が会津若松駅方面。

鶴ヶ城は今迄訪れた中で一番、何か心に感じさせるものがある城だと思う。どの城よりも存在にリアリティがある。美しさも雄大さも力強さも特別ではないけれど、何かここに流れている生命力を感じる。この城は生きている。この城は建て直されたにもかかわらず、会津藩士たちの魂が生きている。そういう感じがした。

会津若松4

鶴ヶ城茶室麟閣を見て、道を隔てた向かいの福島県立博物館へ行く。お城の周りをジョギングしている人が少ない。心なしか市民ランナーというよりはもう少し本格的に練習している人のように見える。大学や社会人の同好会所属といった感じ。それなりのレベル。

福島県は陸上競技が盛んだ。男子長距離、女子400メートルは第一人者を輩出し続けている。福島大学、そのOGを中心とした実業団チームナチュリル（2008年当時）。佐藤敦史選手の奥さんで800メートル日本記録保持者（2017年8月現在）の美保さんはナチュリルの所属（当時）。知り合ったきっかけがふたりが日本代表選手として参加した国際千葉駅伝（当時）。2人とも福島に縁があったことが、2人の距離を縮める一助となったことだろう。佐藤選手が結婚（入籍）を報告した際に実感を込めて言っていた。「これで隠れて会わなくて済むことが、なによりうれしい」。

2人は夫婦での北京五輪出場をめざしたが、敦之選手が並みいる強豪を押しよけて代表を決めたのに対し、美保さんは代表になれなかった。前回のアテネ五輪に東京五輪以来40年ぶりに女子800メートル代表となり出場し、敦之選手より北京は近いと思われていた。国内敵なしの彼女のライバルは記録

だけだったが、その五輪参加標準記録を突破できなかった。夫婦で参加できなかったのは残念だったが、敦之選手が五輪代表になれたのは結婚（美保さん）のおかげだと思う。練習に集中できた。励みにもなった。苦しい時の支えにもなった。そして、何より彼女と一緒に五輪に行こうとモチベーションがはるかに上がった。彼女は、心の安定、安らぎを与えるタイプの女性だ。五輪代表は特別、ほんのささやかな差で五輪代表と非代表に別れる。その目に見えないわずかの差を彼女が埋めた。練習日にもかかわらず、どうしても精神的に乗らない日があることを、彼女は体験的に知っていた。そんな時は、思い切って休むことを勧めたという。みずから全てを陸上競技に捧げ修行僧のような節制した生活をしてしまう佐藤選手には、彼女の存在が良い意味で安らぎとなり、プラスとなった。

美保選手が代表になれなかったのは、選手としてのピークを過ぎていたのが最大の理由だろうが、憶測でしかないが、アスリートとして自分に集中する他に、妻として夫を支えることにも神経を使ったからではないかと思う。敦之選手の代表選考会に競技会場に来ていた彼女をテレビで見て、そう思った。アスリート仲間の顔ではなく、完全に妻の顔だった。代表発表の時も広島に来ていた。2人は、普段は広島と福島で別居生活をしている。私は、彼女は妻として夫を五輪代表にさせたと思っている。

城の横にテニスコートが数面あり、高校生がラケット数本入りそうな、杉山愛が持っているような大きなラケットバッグを背負って自転車で通る。バッグはスカスカ、まだかなりスペースがありそうだ。道を隔てた左手に博物館、右手に陸上競技場。今日も競技場は生徒たちでにぎわっているが、昨日の”enthusiastic”（熱狂的）な賑わいとは違う。今日の賑わいには秩序がある。大会が行われているようだ。それぞれの母校のジャージやトレーニングウェアを着た高校生が会場周辺にあふれている。競技も見たかったが、まずは博物館に行こう。



武家屋敷



白木屋漆器店

会津若松5

福島県立博物館には、石器時代から縄文・弥生の土器に至るまでこれでもかというほど陳列されている。こんなこといったら怒られるが、紀元前1万年前の石器時代から福島にも人が住み九州や大和と同じ文化があったことがわかる。「そりゃあそうだろう」と言うだろうが、今のように新聞やテレビがあるわけではない。飛行機も新幹線も車もない。でも、文化は伝播する。時差はあっただろう。自ら発見、開発した文化もあっただろう。でも時差を除けば、東北も九州も同じ文化があったことを改めて実感する。石器時代は、今の1年が5年、10年、20年、それ以上の時間の長さに相当したのではないか。時間の観念が遅かったというより違っていたであろう。

私が習った日本史教科書では、東北は7世紀頃の阿倍比羅夫、8世紀の坂上田村麻呂の蝦夷征伐から登場し、次が11世紀の奥州藤原氏だったように記憶しているので、つい蝦夷の歴史や東北にも石器時代があったことを忘れてしまう。

陳列室を奈良・平安・鎌倉・室町・戦国・江戸と通る。日本史上の表舞台に現れないが、綿々と月日を重ね、歴史を刻み、生活が営まれていたことがわかる。現代に近づくに従い、変化の速度が早まる。

幕末1862年、14代将軍家茂（いえもち）の治世下、尊皇攘夷の風が吹き荒れ、尊皇・倒幕の志士により京都の治安が従来の京都所司代では守れなくなり、京都守護職を設置し、会津藩主松平容保（かたもり）を任命する。容保も家老の西郷頼母（たのも）も必死に固辞するも初代保科正之の家訓「会津藩たるは将軍家を守護すべき存在」を出され、やむを得ず引き受ける。京都所司代には実弟の桑名藩主松平定敬（さだあき）が就任し、新撰組と連携して京都の治安を守る。1863年8月18日の変で薩摩藩と協力して長州藩を討つ。さらに翌1864年池田屋事件、禁門の変、第一次長州征伐と続く。

京都を守護し、禁門の変では桑名藩・薩摩藩とともに長州を討ち、孝明天皇より書簡と御製（和歌）を賜っている。1866年14代将軍家茂死去、続いて孝明天皇が崩御する。孝明天皇の妹和宮は家茂の正室なのでふたりは義兄弟の関係、しかも仲も良かった。孝明天皇は家茂の病が重くなると、朝廷医を派遣している。家茂の死因が天然痘と記録されていることから謀略説があるが私にはわからない。また、歯が虫歯でボロボロだったそう。この歯ではほとんどまともな咀嚼はできず、いずれにしても長生きはできなかつたともいわれる。容保はこのふたりの信任厚く、また、ふたりのために京都守護職を勤めたところがあり、ふたりの死後京都守護職辞職を何度も願い出るも、幕府も朝廷も引止め、朝廷明治天皇の命によって留任させられる。将軍は慶喜（よしのぶ）が就き、天

皇は明治天皇が即位する。翌67年大政奉還、翌68年1月鳥羽・伏見の戦いで朝敵とみなされる。

なぜ鳥羽・伏見の戦いが起きたのかわかりにくいですが、薩長にとっては天下分け目の関が原の戦いに当たるといっても過言ではない。この戦い直前は薩長には手詰まり感があった。慶喜は大政奉還を受け入れ、幕府は廃絶、辞官、納地も決まった。恭順の意を示す慶喜に対して、薩長はそれ以上前に進めなくなっていた。慶喜を叩く理由がない。さらに、ポスト徳川の新体制はどうするのか？このままでは、朝廷と各藩が話し合っただけで治める公武合体になる。徳川家が政権を返上したからといってそれが、薩長主導の体制になることを意味しない。薩長の優位性はない。他藩が黙っていないだろう。そこで、薩摩が中心になって、幕府を挑発して起こしたのが鳥羽・伏見の戦い、との見方がある。幕府の兵力は薩長のおよそ3倍あった。ただなぜ戦うのか、幕府は戦うモチベーションが低かった。薩長は兵力は3分の1でも戦う目的がはっきりしていて士気が高く、武器（銃）は幕府軍に勝り、指揮系統も戦術も幕府軍に比べて整っていた。結果は歴史のとおり薩長の勝利。この鳥羽・伏見の戦いから戊辰戦争が始まり、慶喜、会津藩、桑名藩、庄内藩は朝敵として追討令がだされる。

薩長はこの戦いを境に立場を一気に優位に替えた。

1. 皇軍（錦旗を手中にした）となった
2. 薩長が中心となり討幕・新政府をつくることになった

3. 二股をかけていた三井など特権商人がついた

4. 近畿以西の諸藩が薩長についた

5. 江戸に攻め上がるきっかけができた

慶喜は鳥羽・伏見の戦いの時、戦場ではなく大阪城にいて、しかも、初日負けた時点で、会津藩主容保、桑名藩主定敬とともに海路江戸に逃げ帰っている。

鳥羽・伏見の戦い（旧暦以下同1月3-6日ごろ）勝利後、薩長は、皇軍として慶喜、会津藩、さらに庄内藩追討令を出し（桑名藩は藩主不在のまま即刻降伏）、3月の勝・西郷の江戸城無血開城、東北戦争と怒涛の如く明治維新を推し進める。慶喜は開城後、4月進んで出身地水戸で謹慎をする。5月慶喜のために戦う幕府軍最後の抵抗、彰義隊は1日で制圧され、幕府の復活の可能性は消滅する。将軍は大政を奉還して戦う気が無いのだから、勝ち目は無い。

かたや会津藩主松平容保も会津に戻り、2月家督を養子喜徳（のぶのり）に譲り、自ら謹慎する。そこに薩長が出した要求が、1. 容保の斬首 2. 開城、3. 領地没収。藩の面子から絶対受け入れるわけがない要求だった。慶喜でさえ斬首は許されている。薩長はどうしても新政府を立ち上げるために、戦勝が必要だったことが推測される。その戦勝の相手が江戸幕府ではなく会津藩だった。

謝罪して謹慎しているのに厳罰過ぎると、会津藩が仙台

藩、米沢藩に嘆願書を送り、薩長軍の追討令とりなしを依頼する。これを受けて、4月奥羽諸藩の重臣達が白石城に集合して話し合う。諸藩は会津・庄内藩に下された薩長の不当なやり方や強引な追討令に対し、嘆願書を提出する。この嘆願書が却下され、奥羽25藩、北越の6藩が加盟して、5月奥羽越列藩同盟が成立する。藩の数こそ30を超え頼もしいが、有力藩は仙台藩62万石、秋田藩20万石、盛岡藩20万石、米沢藩18万石、高田藩15万石、会津藩23万石と庄内藩15万石、後はほとんどが5万石以下の小藩ばかり。ちなみに5万石の三春藩の兵力は約250名だったという。これから類推するに3万石だと150名、1万石だと50名、3万石以下の藩が16藩、半数以上もあった。

列藩同盟が成立した要因はいくつかあるが、まずは、困った時はお互い様、隣藩のよしみで助け合おうという東北の連帯感があっただろう。しかし、美談はここまでで、江戸よりさらに以北の諸藩が、京都で何が進行しており、世の中が大きく変わりつつあるという洞察力が弱かったことも否定できない。大政奉還、王政復古の大号令、鳥羽・伏見の戦い、薩長の戦力、薩長の政治力（朝廷・公家との結びつき）、薩長の思惑、そして、奥羽越は自分たちで統治できるのではないか（薩長の力は及ばない）という過信。これら認識の甘さがあったことは否定できない。7月には同盟盟主に北白川宮能久親王を迎えている（皇族を引き込む）。

さらに不可解なことをしている。奥羽鎮撫総督府に嘆願書を提出して却下され後、却下は参謀の世良修蔵の画策と信じた血気盛んな仙台藩士が、世良を誅殺と川原で斬首してしまう（4月）。嘆願書が却下されたのは、もともとが薩長の戦略で、朝敵になっていたからであって、参謀世良の一存でできることではないのに、また、世良を誅殺したところで嘆願が受け入れられることはありえない。薩長軍は、奥羽鎮撫総督府の3番目の地位の人間が殺されて口実ができた。薩長は奥羽列藩を討つことになり、同盟は戦うしかなくなる。そもそも、戦う気があったとも思えず、嘆願が浮け入れられるのが全目的だったとしたら浅慮すぎ、奥羽越列藩同盟は何をしたかったのか？結局この曖昧な行動が、東北戦争の口火を切ることになった。この世良暗殺の後に列藩同盟は成立している。

奥羽越列藩同盟は、5月白河の関で敗戦した後自滅状態で、3万石どころか5万石以下の藩はどんどん薩長軍に降伏し、会津藩は孤立無援となり8月会津戦争となる。会津戦争で会津藩の死者3千人を超え、籠城生き残りは先に述べたように5千名弱となり、明治元年（1868年）9月22日降伏。庄内藩も24日降伏した。

会津藩は松平家初代が秀忠の庶子であったばかりに、大きな時代の流れに翻弄され、今まで朝廷と將軍家のために勤めていたのが、いつのまにか朝敵、しかも何度も辞職を願い出ているにもかかわらず、それを認められずに引き止められた上

での朝敵。朝敵第一位徳川慶喜はさっさと謹慎して逃げ、大正2年（1913年）まで生き延びて人生を楽しんだ。容保も東北戦争後、命は救われ日光東照宮の宮司となったが、朝敵となった東北戦争のことは一切死ぬまで語らず、明治天皇の先帝孝明天皇から賜った御歌と手紙を肌身離さず、白虎隊の悲劇を負って、明治26年（1893年）に亡くなった。

つまり、白虎隊と会津戦争犠牲者は明治維新のスケープゴートのスケープゴートだった。松平容保が徳川幕府のスケープゴート、そのスケープゴート。そう考えると明治維新はやるせない一面がある、会津若松から維新を見ると。

白虎隊士を埋葬した民間人を処罰し、もう一度掘り起こさせ元の場所に放置を命じた民生局監察、福井藩士久保村文四郎は、2年後任務を終え帰藩途中に会津内で殺された。私刑は犯罪だが、裁判は万能ではない。新政府軍が正規軍で会津藩が賊軍、これも決めつけられない。久保村にも世良にも家族はいただろう。ハンナ・アーレントが裁判で描写したナチス戦犯アイヒマンのように、ただ命令に従っただけなのかもしれない。しかし、ふたりにも殺されるほどの反感を買う過剰な言動があったことが考えられる。是非の問題とは別に、こういうことが起きるのも現実と私たちは認識すべきと思う。

博物館を出て、近くの停留所から御薬園へ行く。御薬園は会津藩主の別邸庭園、第2代藩主が薬草を植えるようになってから御薬園と呼ばれるようになった。

旅行に行くと庭園に立ち寄ることが多いが、思ったより手入れが行き届いていないと感じる。新宿御苑や浜離宮、明治神宮御苑などは例外で、雑草やコケやシダなどが生えていて、剪定が十分なされていないところが多い。定期的に造園業者に頼んでいるのだろうが、手入れを行き届かせるには費用がかかりすぎてしまうのだろう。個人の庭の手入れも結構たいへんだ。特に自分でやろうとすると。自分の庭を何とかしたくて庭園などを見て回るんだけど、自分でやるには手間がかかりすぎ、人に頼むにはお金がかかりすぎる。もっとも、それほど大きな庭ではないが。（父親の庭だった。）育てて欲しくないものばかりすぐ育ち、早く育てて欲しいもの



御薬園

はなかなか育たない。年中手入れをしないといけない。御薬園などを見ると、あまり細かいところに神経を使わず、大きいところ、目立つところだけ手入れをすれば良いのかなと思ってしまう。そして、プロに頼むべきところは、プロに頼む。



御薬園



鶴ヶ城から飯盛山を望む

会津若松6

御薬園の前の停留所から市内循環バス「ハイカラさん」に乗って、いよいよ飯盛山に向かう。

飯盛山に着き入口で200円の通行料を払い、エスカレーターに乗る。階段を登っても良かったが、余計な体力を使いたくなかった。でも、思ったより距離は短く、しかも後半はエスカレーターではなくスロープだった。

まず白虎隊十九士の墓にお参りした。容保（かたもり）の歌もあった。

「幾人の涙は石にそそぐとも、その名は世々に朽（くち）じとぞ思う」

その後、自刃の場、鶴ヶ城炎上と見誤ったといわれる地点を見て、麓に下りた。麓には白虎隊記念館がある。墓標も飯盛山も記念館もなんとなくみすぼらしい。記念館などは県立博物館の立派な建物や職員に比べてボランティアで運営されているような感じで、ショーケースも古い。資料も1万2千点とあるが、玉石混交で整理もきちんとされていない。

しょこたんの写真と色紙が突然あった。なぜあるのか見ると、しょこたんのお父さん中川勝彦が日本テレビ制作の白虎隊で沖田総司を演じたから。白虎隊と土方歳三ならわかる

が、沖田総司ではかなり距離がある（土方は会津に滞在し傷を癒した後、函館戦争で戦う、沖田は会津戦争前に江戸で死去）、という問題ではなく、しょこたんのお父さん？そういうつながりのしょこたんの色紙があるかと思えば、白虎隊士中二番隊37名の全氏名が掲示されている。変に感傷的にならずに済むが、何でも展示すれば良いというものでもないだろう。でも、しょこたんの父親が32歳の時、白血病で死去したミュージシャン・俳優で、かなりイケメンでしかも当時アイドルだったことがわかった。

白虎隊は総勢約300名、身分によって士中、寄合組、足軽隊に分かれ、士中と寄合組はさらに一番隊と二番隊に分かれた。16-17歳（数え年）の藩校日新館で学ぶ藩士の子弟で構成され、戦闘兵士としてではなく、藩主喜徳（のぶのり）や老公（容保）の親衛隊、補助隊として結成された。当人たちの自発的申し出も強く、中には年を1-2歳ごまかして紛れ込むものもいた。自刃という悲劇が起きたのは白虎隊士中二番隊37名のうちの20名、自刃者17名（うち1名は蘇生）、3名は戦死、ただ自刃者と戦死者を区別せず、一般的に自刃者19名とされ、19名の墓が飯盛山にある。白虎隊生き残り255名、死者はこの19名を入れて約50名、8割が生き残れたことになる。

この数字が、白虎隊の悲劇はなぜ起きたのか、何だったのか？という疑問を起こさせる。白虎隊士中二番隊37名が容保とともに護衛のため城下を発ったのは自刃前日、8月22日午

後2時ころだった。程なく後方の滝沢本陣に着き待機していると、戦況が激変し前線が予想外に早く突破され、城下への入口となる十六橋の破壊が間に合わず、薩長軍がこの橋から突入したとの連絡が入る。白虎隊士中二番隊は薩長軍の進軍を食い止めるため、予定にはなかったが、十六橋を渡った会津側の戸ノ口原に急行する。戸ノ口原に着いた時はかなり日が傾きかけていたようだ。他の部隊とともに応戦し、この日は間もなく日没となり自動的に戦いは一時休止となった。

その日の白虎隊士中二番隊の働きは、体力が十分あり、薩長軍は早朝からの戦闘で疲れていたこともあり、善戦したとの記録がある。ひとりの負傷者も行方不明者も出ていない。ただ、突然の召集だったので野営の準備はもとより食料の用意もなく、他の部隊からおにぎりを一個ずつ分けしてもらって野営することとなった。

悪いことに、夜通し雨が降り続いた。夜中にも関らず時々銃声がした。日没休戦となったところでなぜ、本陣なり、城下なり、しかるべき野営地に一旦下がらなかったのか、なぜ留まったのか、ホームなのに、というようなことを今更いっても詮ない。

白虎隊は一番隊も二番隊もそれぞれに、中隊長（リーダー）、小隊長（中隊を2-3グループに分けた時のリーダー）2-3名、半隊長（小隊をさらに2グループに分けた時のリー

ダー）の大人が率いている。つまり士中隊は作戦によって4グループ9-10名に分けられるように組織されていた。そのトップの中隊長が夜中に独りで食料調達に隊を離れ、明け方になっても戻らなかった。

夜が明けるがいなや、一晩ゆっくり休んだ薩長軍が一気に攻撃を仕掛けてきた。昨日の夕方のような薩長軍ではない。武器弾薬も後方より補充され、一気に会津軍は蹴散らされてしまった。白虎隊士中二番隊は中隊長がおらず、適当なグループに分かれて命からがら敗走した。薩長軍の銃撃を受けないところまで逃げてくると、負傷者を含め20名、小隊長の篠田が中隊長に代わって指揮をとることとし、水路を通って飯盛山に逃れる。飯盛山から見ると城は炎上、藩主は自害と思ひ込み、自刃する。（他説あり）

一方薩長軍はそのまま鶴ヶ城に押し寄せ午前中から郭門で激しい戦闘となり、門口が突破される。飯盛山から白虎隊が城炎上と見誤ったのはこの門口突破の際の火災だといわれる。飯盛山から鶴ヶ城を見ると、遠い。3キロ弱ぐらいだが、お城がかろうじて見えるか見えないか。視界が遮ぎられるのではなく、やっとな小さく見える。城が炎上してると見ることもさえ難しい。

最初に浮かんだ言葉は、主君を思い、殉じようとした純粋な少年にたいへん申し訳ないが、「そそっかしい」だった。なぜ、元気な隊士が斥候として状況把握に出なかったか。何も



飯盛山から鶴ヶ城を望む

城まで行く必要はない。状況さえわかればいい。城まで行ったとしても3キロない。帰りに食料調達もできただろう。あまりにも簡単に自刃をしている。白虎隊に限らず、この日城下で老幼婦女子など179人の自刃者が出ている。武士の世界では、自刃は美德でこそあれ、恥ずべきことではないが、短絡的というか、死に急いでいるような感じがしてならない。死が近すぎる。しかし、勇敢、忠君、信念、純粹、一途、健気、死を恐れず、16-17歳若くして命を閉じた彼らの死が、武士道の具現者として、永遠に共感を誘うのもまた確かだ。今の16-17歳とは違い、当時はほぼ成人年齢のはずだが・・・。

午後会津若松駅から帰路についた。磐城西線で郡山に出て（1時間強）、郡山から大宮まで新幹線で50分余、接続時間を入れて2時間半かからずに与野駅に着いた。新幹線は早い。郡山から大宮まで1時間かからない。会津若松から郡山までより早い。

会津若松から小学4-5年生と思われる女の子と乗り合わせた。荷物は小さなバックパックだけだった。電車の席が近かったので時々目をやっていたが、途中で誰かと待ち合わせることもなく、電車にくつろいでひとりで乗車していたので、この路線によく乗るのだろうと思った。その子も郡山で降りた。新幹線のホームに行ったら、その女の子がいた。向こうも私に気がついたようだった。余計な心配をさせたら可哀想なので、あえて違う車両に乗車した。その子も自由席だった。大宮駅で京浜東北線のホームに行ったら、また、その子がいた。もう、1本電車を遅らせることにした。

偶然に京浜東北線まで同じだったが、この日は土曜日だったので、旅慣れた様子から、会津若松に女の子が小学校留学していて週末埼玉の実家に帰省するのだろうと愚察した。そういう学校や留学が会津若松にあるのか知らないが。それともその逆で、実家は会津若松にあり、週末におばあちゃんの家にも遊びに行ったのだろうか。

これが今回の旅行で一番印象に残ったこと、の訳はない。でも、不思議な雰囲気を持った子だった。白虎隊の霊？

会津若松7

佐藤敦之選手が北京オリンピック（2008年8月）で惨敗した。完走選手中最下位の76位。彼に何が起きたのかわからない。美保さんとの夫婦仲が悪くなって、それが精神的苦痛となりあのような結果になったのではないか、との邪推もして少し調べたが、夫婦仲も家族仲も悪くはなさそうだ。何があったのか。もちろん何か原因はあったはずだ。

走りを見る限りケガとは思えなかったのですが、精神的な原因を考えたのだが、病気またはケガだったのだろう。彼のことだから自分の口から洩れることはないかもしれない。彼ならいわゆる「墓場まで持ってい」きそうだから。

彼のゴールとその直後のインタビューを見た。まず、最後の走りはケガや脱水症状などのアクシデントに見舞われているようには見えなかった。ゆっくりだがしっかり走っていた。しかし、その走りは世界トップクラスのスピードからは程遠かった。レース失敗で最もありうるのは、アクシデント（ケガ）を除き、前半のオーバーワークがたたって最後までスタミナが持たずに大失速すること。さらにそれがひどいと、完走できずに棄権となる。もっともありえないのが、この日の佐藤選手のケース。最初からスピードが出ず、そのまま失速してゴール。インタビューで彼が言ったのは、「力不足、結果

を重く受け止める、完走できたのはよかった」、だった。まるで予め用意していたようなコメントだった。彼からは、走った後の高揚感や力を出し切った満足感とは違う、空しい疲労感と静かな安堵感が感じられた。あたかも最初から完走が目標であったかのような、結果がわかかっていたような走りコメントだった。

彼は6月に行われる予定だった母校会津高校での講演会を、五輪後の秋に延期していた。レースの直前に講演会を避けるのは当然ではあるが、2ヶ月前の母校での講演だ。6月の講演は会津高校恒例の、卒業生による講演会だったそうだ。順調ならば、多分講演していたのではないかと思った。そうでなければ最初から引き受けなかつただろう。この時、既に出場が危ぶまれる体調か、ケガだったのではないだろうか。

私の考えでは、この時点でどこかコンディションに問題があったのだと思う。直前ではなく、講演会の前にすでに順調に練習をこなせない状態だったのではないか。どういう状態かは全くわからないが、五輪に間に合うかどうか、という背戸ぎわの状態だったのではないか。だから講演会は延期した。そして、同じ男子マラソン代表の大崎が欠場することになって、佐藤選手は欠場することができなくなった。代表3人のうち2人が欠場では、陸連の選考及び準備調整の責任問題になる。さらに、女子の結果も影響した。先行して行われた女子マラソンで、野口選手はケガで欠場、土佐選手は途中棄

権、中村選手は12位だった。男女出場選手6人中、欠場2、途中棄権2、完走者2ではまずい。佐藤選手は、出場しても勝負できる状態ではなかったが、欠場も途中棄権という選択肢も残されていなかった。目標は完走だった。女子マラソンの土佐選手のように、一か八かの前半勝負して途中棄権することももうできなかった。だから最初からトップグループから遅れ、そのまま最下位完走となったのではないだろうか。「力不足」が彼の精一杯の釈明だったのだろう。確かに、結果が悪い＝「力不足」には違いないから。しかし、本当は、病気またはケガからはなんとか回復したが、出場しても完走が精一杯の当日のコンディションだったのではないかと思う。

そうさせたのは、真面目な佐藤選手の性格で、五輪に向けて自分を追い込みすぎ（練習のしすぎ）たのではないだろうか。もう少し、力を抜いていたら、いい準備ができていたかもしれない。五輪代表を決めた時のように。もう遅すぎるが。

佐藤選手は現在（2017年8月）も日本ハーフマラソン日本記録保持者、2014年京セラ陸上部監督に就任（奥さんの美保さんはコーチ）、二人三脚で指導に当たっている。



付記

幕末ははるか150年前のこと、しかし、まだ何か尾を引いているような会津と鶴岡だった。はるか、と書いたが、150年は「はるか」が適当なのだろうか。「尾を引いている」のも「はるか」も多分、そう感じるだけだろう。観念がそう感じているだけだと思う。しかし、訪れる者にはそれぞれに感慨を与える会津や鶴岡だった。そして、歴史は会津や鶴岡の人の中に生き続けている。

参考文献

- 田中彰(1976)「明治維新」「日本の歴史」24 小学館
丸井佳寿子他(2009)『福島県の歴史』山川出版社
加藤貞仁(1999)『とうほく紀行』無明舎出版
早乙女貢 (2003)『敗者から見た明治維新』NHK出版
中村彰彦 (2001)『白虎隊』文春新書
星亮一 (2005)『会津戦争全史』講談社選書メチエ
小桧山六郎 (2002)『会津白虎隊の全て』新人物往来社
福島県高等学校地理歴史・公民科(社会科)研究会 (2007)
『福島県の歴史散歩』山川出版社

- 山形県の歴史散歩編集委員会 (2011)『山形県の歴史散歩』
山川出版社
横山昭男他 (1998)『山形県の歴史』 山川出版社
(2005)『るるぶ山形(05-06)』「情報版東北5」 J T B
出版
(2007)『会津・磐梯・喜多方』「まっふるマガジン東北09」
昭文社
web : aizumonogatari.com (會津物語>會津歴史逍遙)